



写真提供：林道敏氏

鮎を受ける漁ですね。それで「笠網漁」と呼ばれるようになった。「鮎汲み漁」というのが網の使い方からきた当時の呼び名、今日では「笠網漁」が一般的。2、3年寝かせた竹竿の先に網をはった直径2尺の枠を取り付けて作っている。

もともと何かをつくるのが大好きで、せっかく370年も続いている笠網漁だから昔の文献を見ながらできるだけ忠実に再現し手作りしている。取り付ける網の目の大きさには意味があるんだよ。

目のサイズは4分(ぶ)で12ミリ。それ以下の小さい鮎は

すくわない。余分な殺生はしないために。

漁が許されているのは出沢地区の38軒で漁期も決まっている。収穫は天候や水温、水量、鮎の気分次第で多くて1日1000匹、少ないとゼロ匹。

**保存会があるそうですが。**

出沢地区に370年続いた歴史ある漁法を引き継いでいかないとね。その為の会。日本中探してもこの漁法は他にはないと思う。保存会の中で今笠網を作っているのは自分だけ。世襲制でもない。後継者の育成を特にしている訳ではなく自然とや

か。

**最後に笠網漁の極意は何ですか。**

保存会の浅井先輩の言葉を借りれば 一、鮎が飛び込むのを待つ 二、じっと待つ 三、ただひたすら待つ。鮎は空間を時には高く、時には低く飛び回るのでそのたびに追いかけてはいけません。それが鮎とのルール。鮎に対する礼儀として竿も網も水中には入れない。鮎は水面から上では生きていけないからそれを覚悟で飛ぶ鮎ならば採ってもいいだろう。水面を境にして下は鮎の世界、上はヒトの世界。お互いに相手の世界を犯してはならないというのが約束事。

る気のある人が引き継いでくれると信じている。自分がそうだったから。

**美しい景観や自然界の営みは今後も守れそうですか。**

上流に計画されている大型の人工物ができると無理だろうね。川は生きています。地球という大きな自然の中でね。人間の少しばかりの欲がその営みを崩し、殺しているのだと思いますよ。

も昔からの漁法を継承していただけるよう、周りができることは、たくさん鮎が跳びはねる、気持ちよい環境の維持に協力していくことでしょうか。「収穫は、天候や水温より、鮎の気持ちだと思います。」という林さんの言葉が印象的でした。



# 三百七十年の伝統 笠網漁

**林 道敏さん**

出沢生まれの出沢育ち。名勝鮎滝における伝統漁法「笠網漁」の継承者。

笠網漁の保存・継承だけでなく、出沢地区の活性化にも力を入れており、自らも情報発信している。

<http://www.maroon.dti.ne.jp/michi-h/>

訪問日：平成 25 年 3 月 19 日 (火)

取材者：環境保全課 河合 丸山

本日は知る人ぞ知る新城市出沢(すざわ)区内を流れる豊川(別名寒狭川)中流の滝(通称鮎滝)で、昔ながらの漁法「笠網漁」の保存・継承に奔走する出沢鮎滝保存会の林道敏さんを訪問しました。

**まず初めに鮎滝という名称の由来を教えてください。**

時代は遡って江戸時代、その頃は奥山から切り出した材木は寒狭川が移送の手段だったけれど、流すのに二つの滝がじゃまだった。そこで寛永20年(1643年)新城藩主の水野備後守元綱が藩州高砂から石切の石工を呼び寄せ滝を切り開かせたところが藩の予算は1か所分だけだったので、次の滝は地元の代官である滝川宗右衛門一貞が私費で切り開かせたそうだ。その滝は高さが一条三尺、幅が六間余りとなり丸木流しが楽になり、かつ遡上してきた鮎がよく飛ぶようになったので、いつの間にか「鮎滝」と呼ばれるようになった。

**昔の岩盤工事は大変だったの**



写真提供：林道敏氏

**笠網漁とはどのような漁なのか。**

網の形と当時旅人が頭にかぶっていた「すげ笠」が似ている、その網を滝にかざして飛ぶ

でしようね。

記録によると難工事で半年がかりだった。現代なら火薬を使って簡単にできそうだけれどね。おかげで木材の流通が楽になりその功績が認められて、滝川家には領主から「永代灌元支配」のお墨付きが与えられた。不思議に感じるけど滝は個人のものだった。しかし独り占めはせず、一貞は出沢の村人にも滝での鮎漁を認め彼らの生計を助けたと記されています。